

世親『法華論』の流伝に関する諸問題

——見直されるべきテキストを中心として——

金 炳 坤

はじめに⁽¹⁾

文献学ないしは書誌学といった研究分野において『法華論』というテキストを自身の研究のための一資料として用いたことがある、そういう研究者であれば、一度ぐらひは誰しもが自身の研究資料との関係においてそれが『法華論』の両訳（摩提訳と留支訳）のうち、どのテキストにより近いかといった指摘をなしたことがあるものであろう。

しかしながら、かような研究者たちがその比較のために用いるテキストというのがほぼ外れることなく、19世紀後半以降になって流行り出した近現代の大蔵経（現行本）であるということ。看過してはならないこのような現況に対して我々はあたかもそれが当然であるかのようにただ黙過しているばかりである。

かくいう場合の問題というのはかような比較自体があくまでも現行本との関係性（類似性）を論ずるにとどまりそれを超えられないということ。それがために当然その前提にあらねばならない当該資料自身が実際に用いたであろう当時の流布本とはなんら比較になっていないということが指摘できるのである。

このことは20世紀以降に行われてきた研究スタイルに対して最近筆者が抱いている問題意識にもつながるものである。それは筆者が『法華論』というテキストの歴史的な変遷ないしはその展開をたどることで、後掲の【図】においてみられるような「時代ごとに流行する『法華論』のテキスト」というこれまでに筆者には欠けていた視点に改めて気づかされたからに他ならない。

本稿は、流支訳『法華論』の原訳に最も近い形態を保っているものとみられる流布本の存在について、また、主流でありながらマイナーとされてきた、もしくは非主流でありながらメジャーとされてきた、世親『法華論』のテキストと、

その注釈書におけるテキストの扱い方について再評価を行い、以て一考をなそうとするものである。

1. 本論の原典とその訳本について

婆藪槃豆（Vasubandhu、4世紀頃）による本論『妙法蓮華經優波提舍（*Saddharmapuṇḍarīka-upadeśa）』の著述並びにその梵本については、大師須利耶蘇摩（Sūryāsoma、4世紀頃）、真諦三蔵（Paramārtha、499-569）、唐の神泰（7世紀頃）や新羅の神昉（7世紀頃）らに帰される伝承によってその一端を知ることができる。しかしながら彼らに帰されるかような伝承は、夫々伝僧肇（384-414）記『法華翻經後記』⁽²⁾、僧祥撰（845年以後）『法華經伝記』⁽³⁾、蔵俊（1104-1180）撰か『成唯識論本文抄』⁽⁴⁾でしかみられない、つまりは他の資料による裏付けが得られない、それ独自の記述である。

ことにコータン語（Khotanese）で伝わる『法華經綱要（*Saddharmapuṇḍarīkasūtra-samāsa）』の場合は、本論からの影響が顕著であるとの指摘がなされているが、彼の底本の言語（梵語か漢語か）までは解明されていない⁽⁵⁾。

また、1287年に完成をみる『至元法宝勘同総録』⁽⁶⁾によって本論の蕃本（蔵訳、還梵：*Saddharmapuṇḍarīka-sāstra）の存在が知られるようになったが、その後の1322年にプトウン・リンチェン・ドゥブ（Bu ston rin chen 'grub、1290-1364）によって作成された目録によれば、すでに逸したようである⁽⁷⁾。

基（632-682）撰『妙法蓮華經玄賛』のチベット語訳である『妙法蓮華註（Dam pa'i chos puṇḍa rī kai 'grel pa）』の訳者が、本論の蔵訳といかなる関係にあるかについては今後の検討すべき課題であるが、少なくとも彼はヴァスバンドゥによる本論の存在を認識していたとされている⁽⁸⁾。

漢訳については、曇林の序（散逸か）を具える菩提流支（Bodhiruci、6世紀頃）の二巻本と勒那摩提（Ratnamati、6世紀頃）の一巻本を挙げる『歴代三宝紀』⁽⁹⁾を初見として、『開元釈教録』⁽¹⁰⁾では第二出にして初めに帰敬頌を有する前者（留支訳）と、初出の后者（摩提訳）とが、同本に基づく異訳として大同小異なることを加えているが、そのじつ細々しい字句の相違は枚挙に遑がなく、中国の宋

元明清版、日本の『天海』『黄檗』には帰敬頌を有する後者の別本（後述）が収録されている。⁽¹²⁾ かつ同録では新訳（711年）なる義浄（635-713）の五巻本をも挙げているが、この訳はその後の展開が全く知られていない。⁽¹³⁾

かくして本論のテキストは梵蔵共になく、摩提と留支の漢訳が伝わるのみである。なお、本論の国訳としては現在4種が知られている。⁽¹⁴⁾

2. 摩提訳『法華論』の別本について

摩提訳に帰敬頌はないというのはいまに通用するものではない。もちろん古き摩提訳に帰敬頌のなかったことに異を唱えるものではない。この点については遅くとも8世紀初頭までには成立していたものとみられる資料によって確かめ得るからである。

此の論に二本あり。一には、是れ勒那摩提の所翻なり。帰敬頌無し。二には、是れ菩提流支の所翻なり。帰敬頌有り。〔二本は〕文句小しく異なるも、義意に別無し。今、釈する所は、流支の翻なり。⁽¹⁵⁾

上記の通り、摩提訳の「無帰敬頌」なることを明文化したのは、意外なるや義寂（7～8世紀頃）釈・義一撰『法華經論述記』（以下、『述記』）が初めてのようである。

その前の、本論に対しては初となる『法華論疏』（以下、『論疏』）という注釈書を著すなど、本論の「東アジア仏教的展開」という流れを生み出した吉蔵（549-623）の場合は、平井俊榮氏が指摘する通り、⁽¹⁶⁾ 摩提訳についてはいっさら語らず、その後の、8～9世紀にかけて著された経録の場合は、いっけん見落としがちであるが、じつは留支訳の「有帰敬頌」（註11参照）のことについてしか言及せず、摩提訳の「無帰敬頌」のことについては触れないのである。

両訳における帰敬頌の存否をめぐる問題は、仏書研究の指南書としていまなお高い評価を受けている『望月仏教大辞典』や『仏書解説大辞典』においても「留支訳にあり、摩提訳になし」といったオーソドックスな記述がなされており、⁽¹⁷⁾ い

つしかこれが常識と化しているところであるが、中において注意すべきところは、どちらのケースにしても、前者は『大日本校訂大蔵経』と『大正新脩大蔵経』を後者は「経録」（拡大解釈か）をその根拠としてしっかりと明記しているということである。

要するに筆者の言いたいことは、これらの前提においては必ずしも過誤ありとは言えないが、その前提となる時代や典拠といったディテールの設定が異なれば、直ちに破綻してしまう恐れがあるということである。なせなら、摩提訳に帰敬頌はあるからである。

しかしながら、あえて例を挙げるまでもないほどの多くのケースにあっては、しかるべき根拠を示さぬまま存否だけを切り取って無分別に使っているのが現状である。つまり、いつの時点を基準とし、どのテキストに依拠したかという肝心とすべきところの欠如が問題であるということをごここに指摘しておきたい。

一握りの研究者にしか注目されないところであるが、諸大蔵経の中に収録されている『法華論』のテキスト（以下、蔵経本）は、単に摩提訳と留支訳だけに限るものではない。前述の通り摩提訳には別本があり、留支訳にも別本（本書120頁参照）があって、計4種のテキストが数えられるのである。

諸大蔵経における摩提訳別本の収録状況については、何梅氏がこれをまとめているため、以下に転載しておきたい。⁽¹⁸⁾

【表】「歴代漢文大蔵経目録新考対照表」より

序号	1586	1587-1	1587-2
歴代漢文大蔵経目録新考対照表	妙法蓮華経憂波提舍二卷、婆藪槃豆菩薩积、元魏菩提留支共曇林等訳	妙法蓮華経論優波提舍一卷、婆藪槃豆菩薩造、元魏勒那摩提共僧朗等訳	同左（別本）二卷、同左
開元	習	堂	—
石経	習	堂	—
貞元	資	競	—
至元	邑	都	—
指要	虚	声	—
標目	虚	声	—

金藏	虚	声*	-
麗藏(初雕)	虚	声	-
麗藏(再雕)	虚	声	-
略出	堂	虚	-
福州	堂	-	虚
資福	堂	-	虚
磧砂	堂	-	堂
普寧	堂	-	堂
初南	堂	-	堂
天海	堂	-	虚
縁山	堂	虚	-
南藏	離	-	離
北藏	虧	-	虧
嘉興	虧	-	虧
龍藏	虧	-	虧
黄檗	虧	-	虧
卍字	二二	二二	-
台中	磧15	-	磧15
大正	26	26	-
中華	27	27	27
義門	十九	-	十九
知津	三四	-	三四
縮刻	往	往	-
頻伽	往	往	-
普慧	-	-	-
仏教	40	40	-

摩提訳の別本とは、帰敬偈を有する二卷本のこと、このテキストは12世紀に福州で開版された大藏経を皮切りに、その後の多くの大藏経において収録されていることが確認できるものである。したがって、摩提訳の帰敬頌というのも12世紀の入蔵に際して補入された可能性が考えられようが詳細は不明である。但し、摩提訳の帰敬頌は留支訳のそれとは違って、第三頌の始めの二句が「歸命過未世 現在佛菩薩」の五言ではなく、「歸命過去未來世 現在一切佛菩薩」の七言（本書

154頁参照）になっているところは特異点と言えよう。

3. 流支訳『法華論』の古形について

筆者によってすでに指摘されている通り、吉蔵は『論疏』において2種類のテキスト（㉑㉒）を校勘してその注釈に用いている。⁽¹⁹⁾

但だ此の論に「二本」有り。㉑一には、前序無し。直ちに「経云帰命一切諸仏菩薩」と云う。此れは是れ集経人の請護の辞なり。㉒二には、「帰敬」有り。此れは是れ天親の自作なり。今は具さに〔㉑㉒の〕「二文」に依りて開いて三分とす。一には、三宝に帰敬し、造論の意を申べ、威靈加護を請う。縁起分と為す。…初めに就いて二有り。一には、㉒「天親の帰敬」、造論の意を申ぶ。二には、㉑「集経者の帰敬」、集経の意を申ぶ。⁽²⁰⁾

上記の通り「二本」のうち、㉑は曇林の序がなく、冒頭に集経者による「経云帰命一切諸仏菩薩」⁽²¹⁾（以下、帰命頌）という一文を置くテキスト、㉒は天親の帰敬、則ち現行本にみられる帰敬頌を有するテキストである。

塚本啓祥氏は、ここの「二本」を指して「前者は勒那摩提等訳に、後者は菩提留支等訳に相応する」（塚本1985, 62）と指摘するが、これには論拠がなく、大竹晋氏は「前序あり」と誤読するなど前提から崩れているため参考にならない点も多いが、ここに関しては「吉蔵は菩提流支訳について二つの系統のテキストがあったことを伝えている。…このうち、第二のテキストが菩提流支訳の現行本に該当する」（大竹2011, 108-109）と指摘する。

㉒を現行の留支訳にあてる見解に異論はないが、㉑に関しては、前述の通り吉蔵は摩提訳についていっさい述べないため、順当に考えれば、大竹氏同様、吉蔵が当時の流支訳に2種類の流布本があったことを伝えるものと解すべきであろう。

但し、諸師の指摘する通り、確かに10世紀以降の蔵経本においてこの帰命頌を有するテキストは存在しない。

しかしながら9世紀の資料によれば、世に一卷本の留支訳が行われていたよう

であり、また菩提流支訳『勝思惟梵天所問經』の冒頭にも全く同じ帰命頌（T15, 62a29）が付されており、これが宋元明宮版ではカットされている状況を踏まえると、10世紀以前の流支訳（古形）の中に、分巻をしない、または帰命頌を有する流布本（いずれも和刻本の特徴）があったとしても不思議ではなからう。

さて『論疏』ではこの帰命頌を取り上げて下記のように注釈を施している。

①「**経曰帰命一切諸仏菩薩**」とは、此れ第二の集経者の請護の辞なり。…②「前の帰敬」は、造論の意を申べ、威靈加護を請う。③「此の帰敬」は、集経者の仏経を出ださんと欲し、亦た威靈加護を請う。一切衆経は、皆な並びに此の辞有り。但だ随いて、一文に寄せて略を存することを示すが故なり。

ところで『述記』や円弘撰（733年以前か）『妙法蓮華經論子注』（以下、『子注』）においても下記のように、この帰命頌に対する注釈が行われている。

「**経曰帰命**」等とは、集経者、將に経を出ださんと欲するが故に、先に帰命を結ぶ。一切経は、理、応に皆な有るべし。無きは略を存す。

上記の『述記』における解釈は『論疏』にさほど変わらないが、文末が「道理的にはあるべきであるが、略してない場合もある」と幾分かすっきりとしている感はある。単に踏襲の域を出ないものと見受けられるが、それは『述記』が『論疏』と違って留支訳の別本を底本として用いているからである。

「**経曰帰命一切諸仏菩薩**」…経に三序有り。一には帰敬序、即ち経集の為に序と作す。…此れ則ち初序なり。斯れは乃ち経集家、集経の為めの故に、自ら須らく帰敬すべし。法に帰せざるは略す故に、単経中に無し。略を以て却くが故に。或は有る論本は、此の文を將て偈の前に置く。例の積を為すが故に。

上記の『子注』はやや読みにくい文章で、その解釈は『論疏』とも『述記』とも相応しないが、新しい事柄として文末に帰敬頌の前に帰命頌を置く別行本の存在について言及している。⁽²⁹⁾ 確証はないが、この別行本こそが①にあたるかも知れない。ともかく、世に幾種類もの流布本が流行していたことであろう。

つまるところこれらの事例により入蔵以前の形態を保っている注釈書所引の流支訳『法華論』、則ち8世紀頃までの流布本は10世紀以降の蔵経本とは一線を画す別系統であることが判明するのである。⁽³⁰⁾

もっとも金天鶴氏は『子注』所引の『法華論』を指して「第3のテキスト」⁽³¹⁾（流布本）と称するが、まさしく系統を分類し得る要文こそこの一文になるのである。ひいてはその年代からして、この一文を有するテキストこそが流支訳『法華論』の古形と規定され得るのである。

ところで和刻本に帰命頌を有することが鹽田義遜氏によって指摘されていること⁽³²⁾と、さらには清水梁山氏の国訳がこの和刻本を底本にしていることについてはあまり知られていない。⁽³³⁾

和刻本は寛永二（1625）年に端と発する、帰敬頌と帰命頌をともに有する流支訳の一卷本で、計4種（寛永二年版⁽³⁴⁾、正保三年版、藤田宗継版、寛文九年版）知られているが、諸本との対比（校合）によりこれが流布本と同系統であることが新たに判明したのである。しかもその過程において『論疏』、円珍（814-891）撰『法華論記』（以下、『論記』）の現行本までもが和刻本の影響下にあることが明確になったのである。⁽³⁵⁾

概して言えば『論疏』『述記』『子注』『論記』といった注釈書では、その注釈にあたり該当する『法華論』の本文を全文（『述記』はその限りではない）挙げている。中でも『述記』（前半の義寂解釈部）、『子注』に示される文例は当時の流布本の様子を知る上で極めて重要な資料となる。

対して『論疏』『論記』も『法華論』の本文を全文挙げているが、現行本に頼るばかりでは知る由もないが、じつはこれらの文例は当初よりのものではない。前者は天永四（1113）年の現存する最古の写本からは確認できず、正徳四（1714）年の現存する唯一の和刻本において、後者は承応二（1653）年の現存する唯一の

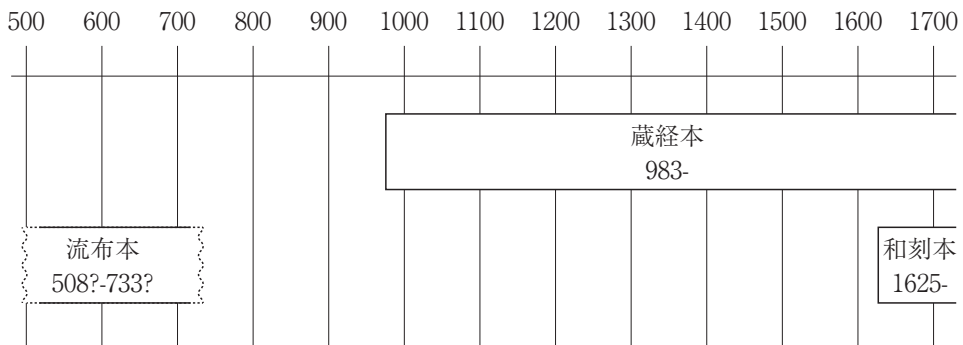
和刻本からは確認できず、大正六（1917）年の『智証大師全集』において、夫々和刻本により補入されたものである。ちなみに当初よりのものは一字下げの本文（後述）に限られる。

加えて慶安五（1652）年の『科註妙法蓮華經論』（以下、『科註』）も和刻本に依っていることが確認できた。⁽³⁶⁾

そもそも流布本の最古層にあたる『論疏』（古形）は流支訳『法華論』の全文を引いておらず、これに次ぐ『述記』（留支訳の別本）や『論記』（摩提訳か）もその底本や省略引用といった問題があり、唯一全文を引く『子注』は一部欠損（巻中、巻下の半分程度）⁽³⁷⁾である分最良とは言えないが、和刻本もその流伝や来歴が定かでない分最古とは言えないのである。

したがって、次なる課題である流支訳『法華論』の古形の復元という大仕事をなすにあたり、現状では『子注』所引の『法華論』こそが最も適した資料であると言えるのである。

【図】 時代ごとに流行する『法華論』のテキスト



考えてもみれば、至極当然のことであろうが、これまでに顧みられることのなかった一視点として、メジャーとも言える蔵経本は、『開宝蔵』（983年）以降現在に至るまで、但し学術的な利用は限定的なものであったと考えられ、いわゆるマイナーに分類される流布本は、本論の訳出以降『子注』の成立前後まで、そしていきさつは不明であるが、流布本と同系統の古いテキストを底本にしたものとみられる和刻本は、1625年以降20世紀初頭までに、ときの主要テキストとして使

用され、かつ流行していたものとみるべきであろう。

4. 吉蔵撰『法華論疏』の現行本について

現在『論疏』のテキストは、日本における近現代の大蔵経、則ち『大日本統蔵経』『大正新脩大蔵経』『新纂大日本統蔵経』の3種に収録されている。これらの蔵経本はいずれも正徳四（1714）年に刻版された和刻本（以下、正徳四年版）を底本にしている。ちなみに『論疏』の和刻本はこの1種しか知られていない。

○論曰下第二論釋就文爲二第一通釋一品凡
爲七門第二別列七門

論曰此經法門中初第一品示現七種功德成就

就初又二句此法門者一部之通號也初第一品
者一章之別稱也七種皆稱功德者此之七種皆
能顯道利物故竝云功德一一章中明義具足無
餘不可破壞故云成就（卷上の8v10-9r6）

しかし、上記の通り正徳四年版において示される『法華論』の2種類の本文（太字と下線）のうち、全文が見出される1種（太字）は吉蔵によるものではない。この種の引文は『論疏』の原文には本来なかったもので、このことは『論疏』の現存する複数の写本（本書121頁参照）にこの種の引文がみられないことから確かめられる。つまり、正徳四年版において『論疏』の原文と言えるものは一字下げで示される文章に限られるのである。

よって、下線で示した短文だけが吉蔵による本論の引用にあたり、みての通りその範囲は限定的なもので、本来の『論疏』に『法華論』の全文が見出されるわけではない。この引文（下線）こそが吉蔵が用いた流支訳『法華論』の古形を示すものであるが、例えば『論疏』でしかみられない「七種皆称功德」という引文は、逆に本論のその後における様々な展開を窺わせる好例と言えよう。

本山〔＝比叡山か〕に実に蔵するは、大僧正〔＝実観か〕がかつて本論を分会〔＝『法華論』の本文を補入〕し、兼ねて校訂を加えたものを具す。余〔＝咸潤か〕、流通を請い許〔可を取得〕するに、近しい者のある人、その梓行を随喜し、古本〔＝『論疏』〕を寄来る。これによって校讎するに、脱字・錯誤ややあり。よって、諸々の格〔＝異同か〕を上〔＝頭注か〕に挙げ、傍らに国語〔＝乎古止点〕を加う。⁽³⁸⁾

さて上記の「刻法華論疏序」によれば、この種の引文は実観によるものと推定される。補足すれば、正徳四年版において行頭を空けずに示される、元々『論疏』にはなかったこの種の引文は、正徳四年版の底本、則ち「実観分会」⁽³⁹⁾の『論疏』において元から組み込まれていたもので、これが咸潤によってそのまま活かされたものと推量される。これに咸潤は『論疏』の古本（不明）と『法華論』のテキスト（不明）を用いて「実観分会」の『論疏』と校合し、その結果を頭注において付している。体裁の組み替え（行頭のツメや字下げなど）までは不明であるが、正徳四年版における彼の関与はこの程度のものであったと考えられる。

また、実観が分会に用いた『法華論』というのは、その近似性からしても和刻本に他ならないが、「序品第一」など実観による加減が施されているようで、和刻本に全同ではない。ただ、数あるテキストの中で、彼がこの和刻本に目をつけた理由は、もしかすると、彼がこの和刻本の底本の古さを見抜いていたからであるかも知れない。

『論疏』の正徳四年版は、実観と咸潤による2度の校正を経ている分、ある意味最良のテキストとも言えようが、上記のような背景を勘案した上で適切に扱わないといけな。要するに『論疏』を写本でなく、現行本で用いる際には、このような特徴を理解すべきであるということである。

おわりに

かくして本稿では、世親『法華論』のテキストと、その注釈書におけるテキストの扱い方について再評価を行うべく、①その底本こそ古いと雖も、17世紀に日

本において成立した一卷本で帰命頌を有する流支訳『法華論』の和刻本に影響を受けて、実観がこの和刻本の本文を『論疏』の中に取り入れている、この実観分会の正徳四年版を底本とする、非主流でありながらメジャーとされてきた吉蔵撰『法華論疏』の現行本について、②またこれまであまり注目されてこなかった12世紀以降に開版されたほとんどの大蔵経においてその収録が確認できる、主流でありながらマイナーとされてきた二巻本で帰敬頌を有する摩提訳『法華論』の別本について、③さらに『論疏』において初めてその存在が知られるようになった「経曰帰命一切諸仏菩薩」（帰命頌）という流支訳『法華論』の古形を示す一文が『述記』や『子注』においても注釈されていることから、8世紀初頭までの流行が確認できる、流支訳『法華論』の原訳に最も近い形態を保っているものとみられる流布本の存在について、④加えてこの流布本（第3のテキスト）が『子注』の底本として用いられていたこと、⑤和刻本の底本もこの流布本と同系統であること、⑥『論疏』『論記』の現行本と『科註』が和刻本の影響下にあることを指摘し、以て見直されるべきテキストの知られざる一面について講究した。

とりわけ本稿では、『法華論』というテキストの流伝に関する諸問題として、時代ごとに流行する流布本、蔵経本、和刻本を取り上げ、これら諸本の歴史的な変遷ないしはその展開に関する一視点を提示した。また8世紀以前の『法華論』の注釈家たちが実際に手にしていた『法華論』の姿を復元するための、その土台作りにあたる基礎的研究をなしており、その実行にあたっての最良の資料が『子注』所引の『法華論』であることを指摘し、その資料的価値や新たな意義を付与することによってさらなる研究を促している。

註

- (1) 本稿は、金炳坤2017「流布本『妙法蓮華経優波提舍』考」『宗教研究』90(Suppl): 306-307の改訂増補版である。
- (2) 『法華経伝記』巻第一「勘舊梵文。宛若斯。予昔在天竺國。時遍遊五竺。尋討大乘。從大師須利耶蘇摩。飡稟理味。懇懃付囑梵本言。佛日西入。遺耀將及東北。茲典有緣於東北。汝慎傳弘。昔婆藪槃豆論師。製作優婆提舍。是其正本。莫取捨其句偈。莫取捨其真文」(T51, 54b7-12、下線筆者、以下同様)
- (3) 『法華経伝記』巻第一「眞諦三藏云。西方相傳。說法華大教。流演五^[52n22]天竺。造優婆提舍。釋其文義五十餘家。佛涅槃後五百年終。龍樹菩薩造法華論。六百年初。堅意菩^[52n23]薩造釋論。並未來此土。不^[52n24]測旨歸。九百年中。北天竺丈夫國國師大婆羅門橋尸迦子

- 婆藪槃豆。此云天親。亦製法華論。以六十四節法門。釋其大義」[52n22: [天] - 甲] [52n23: 薩 + (亦) 甲] [52n24: 測 + (其) 甲] (T51, 52c25-53a2)
- (4) 『成唯識論本文抄』卷第二(論第一之二)「神泰師章云。又法花論云○今勘梵本。無如此文。…神叻章云。法花論。梵本趣寂不熟。上慢未熟(云云)」(T65, 423a12-18)
- (5) 詳しくは、片山由美2014a「コートン語『法華經綱要』の試訳」『身延論叢』19: 59-74、片山由美2014b「コートン語『法華經綱要』の研究」『法華文化研究』40: 11-34、Yumi KATAYAMA 2014c「The Khotanese Summary of the *Saddharmapuṇḍarikasūtra* and the *Saddharmapuṇḍarikopadeśa*」『Acta Tibetica et Buddhica』7: 83-102参照。
- (6) 慶吉祥等集『至元法宝勘同総録』卷第八「梵云薩怛囉(二合) 麻 遼恒伽迦 沙悉特囉…右二論同本異譯與蕃本同」(S2, 227c18-25, Sは『昭和法宝総目録』の略語、以下同様)
- (7) 西岡祖秀1981「『プトゥン仏教史』目録部索引Ⅱ」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』5: 43-94の55頁に「667 Pad ma dkar poḥi ḥgrel pa dByig gñen gyis mdzad pa / [667『蓮華註』世親の著]」(〔亀甲括弧内〕筆者、以下同様)とあり、これが「IX de rnamts btsal bar byaḥo [IX 探索されるべき典籍]」の項目に記載されている。詳しくは、庄司史生2014「チベットの仏典目録にみられる漢文蔵訳文献について」松村壽巖先生古稀記念論文集刊行会編集『日蓮教学教団史の諸問題——松村壽巖先生古稀記念論文集——』山喜房佛書林、65-83参照。
- (8) 詳しくは、望月海慧2013「チベット語訳『妙法蓮華註』の序文の構成について」『身延山大学仏教学部紀要』14: 1-22、望月海慧2015「『法華玄賛』のチベット語訳の特徴」『仏教学レビュー』17: 39-77、MOCHIZUKI Kaie 2017「Vasubandhu's Commentary on the *Lotus Sutra* in Tibetan Literature」『印仏研』65(3): 1263-1270参照。
- (9) 費長房撰(597年)『歴代三宝紀』卷第九「妙法蓮華經論二卷〈曇林筆受并製序〉」(T49, 86a22)、同「法華經論一卷〈侍中崔光筆受〉」(T49, 86b25)
- (10) 智昇撰(730年以後)『開元釈教録』卷第六「妙法蓮華經論一卷〈婆藪^[540n6]盤豆菩薩造亦云法華經論侍中崔光僧朗等筆受見長房録初出與菩提留支譯者大同小異題云妙法蓮華經優^[540n7]波提舍〉」[540n6: 盤 = 槃 宋元] [540n7: 波 = 婆 宋] (T55, 540b4-5)、同「法華經論二卷〈題云妙法蓮華經優波提舍或一卷曇^[541n7]林筆受並製序第二出與前寶意出者同本初有歸敬頌者是見續高僧傳〉」[541n7: 林 = 琳 三] (T55, 541a18-19)
- (11) 『開元釈教録』卷第十二(別録之二)では「法華經論二卷〈初有歸敬頌者或一卷〉」(T55, 607b27)とし、一貫して「歸敬頌」という言い方が用いられているが、同箇所を引く、円照撰(800年)『貞元新定釈教目録』卷第二十二では「法華經論二卷初有歸命頌者或一卷」(T55, 940c28)と、これが「歸命頌」に置き換えられている。また『法華經伝記』卷第一では「勅以流支。爲譯經之元匠^[53n5]也。重譯成二卷。曇林^[53n6]受并製序。題云妙法蓮華經優婆提舍。初有歸敬頌者是也。與寶意譯大同少異。彼題同云妙法蓮華經優婆提舍。而無歸命頌也。此土亦有作論者。如胡吉藏玄論等。不可具述矣」[53n5: [也] - 甲] [53n6: (筆) + 受 甲] (T51, 53a16-21)とあり、流支訳は「歸敬頌」、摩提訳は「歸命頌」というふうに使分けがなされている。
- (12) 末光愛正1983「吉蔵の法華論引用に於ける問題」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』15: 103-113の109頁参照。但し、「ただ高麗本の勒那訳のみ歸敬頌が存在しない」というのは誤りである。
- (13) 『開元釈教録』卷第九「法華論五卷〈莫知造者單重未悉景雲二年譯〉」(T55, 568b2)、同

卷第十二（別録之二）「右二論同本異譯〈其三藏義淨新譯法華論五卷尋本未獲〉」（T55, 607c2）

- (14) ①清水梁山1922「國譯妙法蓮華經優婆提舍」國民文庫刊行會編『國譯大藏經』論部 第五卷、國民文庫刊行會、1-49、②訳者不明1931「妙法蓮華經憂婆提舍」昭和新纂國譯大藏經編輯部編『昭和新纂國譯大藏經』論律部 第九卷、東方書院、403-444、③藤井教公・池邊宏昭ほか2001「世親『法華論』訳注(1)』『北海道大学文学研究科紀要』105: 21-112、藤井教公・池邊宏昭2002「世親『法華論』訳注(2)』『北海道大学文学研究科紀要』108: 1-95、藤井教公・池邊宏昭2003「世親『法華論』訳注(3)』『北海道大学文学研究科紀要』111: 1-70、④大竹晋校註2011『法華經論・無量壽經論 他』（新国訳大藏經¹⁴ 釈経論部18）大藏出版、157-255。
- (15) 『法華經論述記』「此論二本。一是勒那摩提所翻。無歸敬頌。二是菩提^[779n9]流支所翻。有歸敬頌。文句小異。義意無別。今所釋者^[779n9]流支翻也」[779n9: 流藏本作留次同]（X46, 779c23-780a1）、金炳坤（桑名法晃研究協力）2014「義寂釈義一撰『法華經論述記』の文献学的研究(1)』『身延山大学仏教学部紀要』15: 19-43の22頁参照。
- (16) 平井俊榮1987『法華玄論の註的研究』春秋社、37頁参照。
- (17) 「妙法蓮華經憂婆提舍…二卷…後魏菩提留支共曇林等訳。…初に五言四句三行半の帰敬頌を置き、…現藏中に亦別に妙法蓮華經論優婆提舍一卷（縮往六、正二六）あり、元魏中天竺三藏勒那摩提共僧朗等訳と署せり。之を今の本に比するに訳語は全同なるも、初に帰敬頌なく、又章段の前後、字句の差異及び具欠等あり」（望月信亨編1933『望月佛教大辭典』第五卷、世界聖典刊行協会、4806頁、旧字体は新字体に改めた。以下同様）、「本書には菩提留支訳と勒那摩提訳の二訳がある。菩提留支訳は二卷、勒那摩提訳は一卷であると経録に記されている。内容は最初に十四句偈の有るのが留支訳で偈の無いのが摩提訳というに過ぎない」（田島德音1935「妙法蓮華經憂婆提舍」小野玄妙編『佛書解説大辭典』第十卷、大東出版社、367頁）
- (18) 何梅2014『歴代漢文大藏經目録新考』下冊、社會科學文獻出版社、1006-1009頁参照。麗藏（初雕）やその千文字函号などは筆者の加筆。太字は現存する大藏經を表す。なお、本書収録の筆者の論攷では、何梅氏による諸大藏經の略語を用いた。加えて諸大藏經の確認は、立正大学図書館及び国際仏教学大学院大学附属図書館において行った。とくに後者の利用にあたっては、恩師の藤井教公教授に特別のご高配を賜った。ここに記して深謝の意を表する次第である。
- (19) 金炳坤2016a「円弘『妙法蓮華經論子注』の新理解（韓国語）」韓国思想史学会・東国大仏教文化研究院 HK 研究団・神奈川県立金沢文庫編『新羅写本と元曉』韓国思想史学会・東国大仏教文化研究院 HK 研究団・神奈川県立金沢文庫、1-17の14頁では「吉藏は『論疏』において『法華論』の2種類のテキストを自らが校訂して使用している」と指摘した。なお、先行研究である、金天鶴2015「『法華經論子注』写本の流通と思想（韓国語）」『東アジア仏教文化』24: 155-183の164頁、金天鶴（金炳坤訳）2020「『法華經論子注』写本の流通と思想」『身延論叢』25: 1-32の10頁では「吉藏が二つのテキストを組み合わせて注釈しているものと推定される」と指摘される。
- (20) 『論疏』卷上「但此論有二本。一無前序直云經云歸命一切諸佛菩薩。此是集經^[785n4]人請護之辭也。二有歸敬此是天親自作。今具依二文^[785n5]開三分。一歸敬三寶申造論意。請威靈加護爲緣起分。…就初有二。一天親歸敬申造論意。二集經者歸敬申集經意」[785n4: 人

- =者¹原」〔785n5: (大)¹+開原〕(T40, 785b4-11)、金炳坤 (2014, 37 (n80)) 参照。
- (21) 塚本啓祥1985「法華經讚頌の覚え書」『法華文化研究』11: 23-66の63頁に「婦命一切諸仏菩薩」は namaḥ sarva-buddha-bodhisatvebhyaḥ (婦依文Ⅲ①) に相応し、婦依文の原形とみなしうる」と指摘される。
- (22) 栖復集 (879年)『法華經玄贊要集』卷第六「問本論幾譯。答兩譯。一法華論一卷。梁武帝代。中天竺國三藏勒那摩提。於洛陽殿內譯。侍中崔光筆授。出長房錄。二法華論一部兩卷。二十九紙。後魏菩提留支譯。曇林筆授。今此本一卷。疏依魏論。以釋秦經〈下解疏〉」(X34, 292c22-293a2)
- (23) 前掲の国訳②の頭注に「【經に等】これ集經者が請護の辞。」(訳者不明1931, 1) とあり、これが『論疏』に依っていることが分かる。
- (24) この一文は、中井本勝 (金炳坤研究協力) 2016「吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究(1)」三友健容博士古稀記念論文集刊行会編『智慧のともしび——アビダルマ佛教の展開——三友健容博士古稀記念論文集——』中国・朝鮮半島・日本篇、山喜房佛書林、832-806の819-818頁により訂正したものである。
- (25) 『論疏』卷上「經曰婦命一切諸佛菩薩者。此第二集經者請護之辭。…前歸敬申造論意請威靈加護。此歸敬集經者欲出佛經。亦請威靈加護。一切衆經皆^[786n5]並有於此辭。但隨寄一文示存略故也」〔786n5: 並=應¹原〕(T40, 7786a17-22)、金炳坤 (2014, 37 (n80)) 参照。
- (26) 『述記』と『子注』の前後関係については現段階では不明である。詳しくは、金炳坤 (2016a, 10-11) 参照。
- (27) 『述記』「經曰婦命等者。結集經者。將欲出經。故先歸命。一切經者。理應皆有。無者存略」(X46, 780b15-16)、金炳坤 (2014, 24-25, 36 (n76)) 参照。
- (28) 『子注』卷上「經曰婦命一切諸佛菩薩。…經有三序。一歸敬序。即爲結〔經か〕集依〔削除記号あり〕序作〔反転記号あり〕。…此則初序。斯乃經集家。爲集經故。自須歸敬。不歸法者。略故。單經中無。以略却故。或有論本。將此文置於偈前。爲例釋故」(2r6-13)
- (29) 金天鶴 (2015, 165)、金天鶴 (2020, 11) 参照。
- (30) 7～8世紀の成立と推定される敦煌本に関しては、摩提訳 (BD11838・S.2504)、両訳混合 (BD10071・BD07753) とも首欠なるがゆえに判然としない。
- (31) 金天鶴 (2015, 169)、金天鶴 (2020, 16) 参照。
- (32) 鹽田義遜1943「法華論の研究」『棲神』28: 1-48の3-4頁参照。
- (33) 詳しくは、桑名法晃2016「『法華論』版本の研究——清水梁山国訳『法華論』の底本を視点として——」『東洋文化研究所所報』20: 17-62参照。
- (34) 【寛永二年版】本書収録の寛永二年版は2丁分 (24丁と27丁) の落丁があり、これが誰かによって手書きで補われているが、この補いの2丁分を他の寛永二年版と比較した結果、一言一句違わず全同であることが確認できた。さらにその補いの過程で、正法三年版とも対照を行っているようで、その異文情報までもが指摘されている。ちなみに両版は、行数は同じであるが、字数は同じでない。
- (35) 詳しくは、本書収録の「流支訳『法華論』の流布本について——序品を中心として——」を参照されたい。
- (36) (4)『科註』、(5)『論疏』(正徳四年版)、(6)『論記』(『智証大師全集』)と和刻本の関係については本書19頁以降を参照されたい。
- (37) 金炳坤2016b「『三平等義』の成立に関する研究」『身延山大学仏教学部紀要』17: 1-34の

1頁参照。

- (38) 咸潤撰（1714年）「刻法華論疏序」「本山實藏具大僧正嘗分會本論兼加校訂。許〈余〉請流通。近者有人隨喜其梓行。寄來古本。據之校讎。脫字錯誤稍稍而在。因舉諸格上。傍加國語」（卷上の前付）
- (39) 実観分会としては『摩訶止観輔行会本』十卷（比叡山止観院蔵版）、『観無量寿仏経疏妙宗鈔』五卷（貞享四〔1687〕年の実観の序あり）などが知られる。